# 特集　座談会「本学における歯学教育の現状と将来 ―卒前臨床実習をめぐって―」の企画並に採録を担当したことについて

編集委員　高江洲　義　矩，　田　中　久　敏

岩手医科大学歯学雑誌編集委員会による特別企画で，第2回目の本誌特集として「本学における歯学教育の現状と将来」について座談会形式による記事をとりあげてみることを試みた。

主題が広範囲にわたる内容なので，かなり懸念したが，まず発言者を思いきって新卒業予定者，すなわち6年次の学生を中心とし，そしてやはり卒業後1～2年の新医局員を交えての構成にした。

司会には，本学歯学部第1回卒業生で，現在，歯科保存学第2講座で活躍しておられる菅原教修講師にとくにお願いして，難役を引き受けていただいた。

企画した側の主旨としては，広く本学歯学部教育全体の現状を浮き彫りにして，さらに，そこから今後の本学歯学教育の展望をのべてもらうことにした。勿論，熟成した視角からの内容を期待しているのではなく，もっともフレッシュな感想で，日頃本学の教育の現状と将来について強く感じている点についてのべてもらったらと願った。

さて，座談会をスタートしてみると，期せずして話題は卒前臨床実習の内容に集中し，延々5時間におよぶ結果となった。雑誌編集の都合上，その中から，いくつかのトピックスに分けて圧縮して採録せざるを得なかった。

採録した側としての印象は，出席者の全員がきわめて真剣に長時間の討論を続け，しかも，その中には短い会話の中にするどい洞察力とたくましい先明の見通しに，さらにユーモア溢れた話し合いが織り成していた。はたして，ここにとりあげた話題と表現からそれらが読者に伝わるかどうか採録担当者としてもっとも気がかりなことである。その責任はどうも採録者にかかっているようである。

この座談会が，本学における歯学教育，中でも卒前臨床実習教育に教える側，教わる側ともども反映されるならば，担当編集委員としては無上の喜びである。

（53，6，10）